

Title	言語文化共同研究プロジェクトの10年：『英語文学の越境』の出版を記念して
Author(s)	木村, 茂雄
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2009 P.65-P.70
Issue Date	2010-05-31
Text Version	publisher
URL	<a href="http://hdl.handle.net/11094/77359">http://hdl.handle.net/11094/77359</a>
DOI	
rights	
Note	

*Osaka University Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

# 言語文化共同研究プロジェクトの10年

——『英語文学の越境』の出版を記念して——

木村 茂雄

## 1. はじめに

言語文化共同研究プロジェクトは、平成16年度まで存続した言語文化部と、大阪外国語大学との統合以前の言語文化研究科により、平成12年（2000年）度に開始された。平成21年（2009年）度の今回のプロジェクトでちょうど10年目を迎えたことになる。私たちの共同研究「ポストコロニアル・フォーメーションズ」は、その後半の5年間継続してきたが、しかしこのプロジェクトは、言語文化共同研究プロジェクトの初年度から開始した「カルチュラル・スタディーズ理論と実践」をその前身としている。さらにこの研究プロジェクトは、その4年前から行っていた、ある研究会の活動にもとづいている。また、これらふたつのプロジェクトのあいだには2年の空白期間もある。そのような紆余曲折についてもあとで少し触れたいと思うが、いずれにしても、言語文化共同研究プロジェクトの10年目という節目に、ふたつの共同研究の「報告書」に掲載された論文を編纂した1冊の本『英語文学の越境—カルチュラル／ポストコロニアル・スタディーズの視点から—』（木村茂雄・山田雄三編、英宝社、2010年3月）が刊行されたことは、少なくとも私にとっては感慨深いものがある。

もともと、これは10年目ということをとくに意識したわけではなく、どちらかといえば偶然の産物だが、この機会にふたつの共同研究が歩んできた道筋を簡単に振り返ってみることは、これからのその形成＝フォーメーションズを探るためにも無意味なことではないだろう。それに合わせて、『英語文学の越境』についても簡単に紹介させていただければと思う。以下の回想や紹介には、この本の「はじめに」（木村茂雄）と「おわりに」（山田雄三）の内容と一部重なる点があることをお断りしておく。

## 2. CSC から PCF へ

私たちの共同研究の「ルーツ」は、平成8年（1996年）の春に活動開始したカルチュラル・スタディーズの研究会にさかのぼる。「正式名称」はカルチュラル・スタディーズ・サークル（Cultural Studies Circle）だが、普通はそれを略してCSCと呼びならわしていた。「サークル」は文字通りサークル活動のサークルであり、言文の教員と院生が自由に参加できる気楽な研究会をイメージしての命名である。

それでは、どのような意図からこの「サークル」を立ち上げたのか？ その背景はある意味で複雑だが、言文の教員サイドの状況としては、それはひとつの世代交代の表れでもあったように思う。この時期は、言語文化研究科の教育研究をそれまで支えてこられた「文化関係」の諸先生が相ついで退官・退職された時期でもあった。「その後」の体制をどのように再構築していくかという意識、あるいは気負いのようなものが、少なくとも当時の私にあったことは否定できない。そのような私の意識あるいは気負いを、もっとも強く分かち合い、CSCの立ち上げに協力してくれたのは、6年前の早世がいまだに悔やまれる、広瀬雅弘さんだったと思う。

これが「内輪」の話だとするなら、この時代は「世界的」な規模でも、文化研究の見直しあるいは活性化が進められていた。いうまでもなく、カルチュラル・スタディーズの流行である。ここで「世界」というのは、おもに英語圏の学界のことにすぎないかもしれないが、第2次世界大戦後のイギリスに端を発したこの分野が、1980年代以降、アメリカ、カナダ、オーストラリアなどに飛び火し、それが他の欧米地域や日本をはじめとする「アジア」の学界にも強いインパクトを与えつつあったことはたしかだ。

CSCの最初の集まりは、1996年の春、カルチュラル・スタディーズの当時の活況をもっとも生き生きと伝えていた1冊の論集 *Cultural Studies* (Routledge, 1992) の輪読会からはじまった。1990年にアメリカで開かれた大規模な国際学会をもとにした、700ページを超える大著である。執筆者の名前の順番に40編の論文が並んでいるが、これを21回の研究会で、端から端まで辛抱強く読んで行った。その最初は、広瀬さんがスチュアート・ホルの“Cultural Studies and Its Legacies”を、言語研究科第2期生の森野豊さんが、ポール・ギルロイの“Cultural Studies and Ethnic Absolutism”を担当した。当時の教員グループと院生グループのエースによる先発といえるが、この研究会はその後もしばしば教員と院生からそれぞれ1名、計2名を担当者・発表者とするかたちを取った。そのパターンは現在の研究会でもおおむね踏襲されている。しかし、言語文化共同研究プロジェクトもまだ存在していなかった当時、授業を離れた「サークル活動」で教員と院生とが水平的に共同するという形式や意識は比較的新しく、そのような関係を作り上げること自体、ひとつのプロジェクトだったようにも思う。

それはともかく、この研究会はこの論集を皮切りに、カルチュラル・スタディーズの「創始者」とされるレイモンド・ウィリアムズの *Culture and Society* (1958) や *The Country and the City* (1973)、スチュアート・ホール関係の論集 *Stuart Hall: Critical Dialogues in Cultural Studies* (1996) などを読み進めるとともに、それに並行して、各メンバーがそれぞれの関心から選んだ論文を取り上げるという、2本立てのプログラムに移っていった。

一方、1990年代の後半は、言語文化部／言語文化研究科も、組織を挙げての大きな学術イベントに取り組んでいた時期でもあった。CSCが活動を開始した直後の1996年7月には、国際シンポジウム「言語文化の可能性」が開催された。CSCにとってとくに記憶すべきは、このシンポジウムに参加したガヤトリ・スピヴァクの発表原稿の日本語訳を、そ

の教員メンバーが中心となって、ほとんど突貫工事で仕上げたことだろう。もとはといえば彼女の原稿提出が遅れたための状況だが、スピヴァクの文章の晦渋さを思えば、いまだに冷や汗ものの「翻訳」である。スピヴァクの講演では、この作業をもとにCSCの伊勢さんが通訳・司会を務めた。その準備で彼女に話を聞きに行った伊勢さんと森さんが、スピヴァクにサンドイッチをご馳走になったことなども語り草になっている。

さらに2年後の1998年（平成10年）7月には「大阪大学・ユペンハーゲン大学学術交流プログラム記念シンポジウム」が開催された。その背景やシンポジウムの発表要旨などは『言文だより No.16』にも特集されているので、詳細はそこに譲るが、2日間にわたって7つのシンポジウムが開かれ、CSCはその第5シンポジウム「カルチュラル・スタディーズの試み」を担当した。パネラーは伊勢芳夫、木村茂雄、里内克巳、森祐司、山田雄三の5人である。個々の発表にはもちろん各自の関心が反映されていたが、それを横断する問題意識として4つの柱、すなわち「文化主体の問題」（誰が誰の文化を、誰に対して語るのか）、「専門性と学際性」（カルチュラル・スタディーズの理論的・方法論的な問題）、「文学研究との関連」（文学研究とカルチュラル・スタディーズとの関係）、「アジア・欧米における日本の位置づけ」（日本という「文化主体」をどのように捉えるか）が設定されていた。当時の私たちの関心を伝えると同時に、いまだに重要な問題提起でもあるだろう。『言文だより』の渡辺秀樹氏によれば、40名ほどの出席者があったとのことで、その点では「人気シンポジウム」のひとつだったらしい。

言語文化共同研究プロジェクトが開始されたのは、そのさらに2年後の2000年である。ここにも組織としての色々な意図が込められていたにちがいないが、1990年代後半の言語文化部／言語文化研究科の上のような取り組みが、このような企画の機運を高めていたこともたしかだろう。CSCもそこに「カルチュラル・スタディーズの理論と実践」というプロジェクトにより参加したわけだが、CSCの活動をこのように「制度化」することへの戸惑いもあったことは付け加えておかなければならない。カルチュラル・スタディーズは単に「文化学／文化研究」ではない。「文化」とはただ単に客観的に存在するのではなく、それをどのような社会的・政治的な位置から作るか／見るかによって、その意味を複雑に変化させるものだという、広い意味での政治的な意識が、この「学」のひとつの中核をなしている。したがって、それを研究する制度的な状況にも敏感にならざるを得ないのだ。

「言語文化学の可能性」でスピヴァクは、この「制度化」の問題について質問を受けた際、「手元にある道具は何でも使いこなしていく」と切り返していた。また、スチュアート・ホールは「固定化」は駄目だが「制度化」は悪いことでもないと述べている。その精神にならって、というのも大袈裟だが、CSCも平成12年（2000年）度から平成15年（2002年）度までの3年間、言語文化研究共同プロジェクトの一環として3冊のプロジェクト報告書を刊行した。ただし、この制度化された企画からは、メンバー資格のない研究科修了生などが除かれてしまうという問題も生じた。つまり、研究会に二種類のメンバーが含まれることになるわけで、これはいまだに解消されていない問題と言わなければならない。

CSCは、共同研究プロジェクト初年度の平成13年(2001年)の2月に「オープンCSC」というイベントを企画したが、これもそのような「制度化」に対する問題意識と無関係ではなかったように思う。「コミュニティ、知識人、メディア」と題したシンポジウムを中心とする集まりだったが、シンポジウムのパネラーには、教員の森祐司、山田雄三、木村茂雄の他に、院生の小池隆太と竹山直子加わった。当日は、言文の教員と院生だけでなく、他大学の教員や学生などにも「オープン」に参加してもらうことができた。ちなみにその案内文には、CSCは「現在まで50数回の例会を重ねてきました」とある。

この時期の研究会活動は、ある意味で今よりも雑多な関心を含み込み、それを身近な状況に発信しようとする姿勢も強かったように思う。院生の場合はメンバーの移り変わりがとくに早いので、関心の中心が移ったりその「発信」の形態が変わったりすることも不思議ではないが、それにしても、この時期のCSCの一種の熱気は忘れないでおきたいと思う。

院生メンバーの研究関心に対応するという意味がやはり大きかったと思うが、共同研究の3年目には、アメリカ文化に集中したプロジェクト「アメリカ文化研究の可能性」が、CSCから分岐して立ち上げられた。と同時に「カルチュラル・スタディーズの理論と実践」は、この年度が最後になる。ただし、これはまったくの休眠というわけではなかった。その年度の報告書のサブタイトル「帝国の文化とポストコロニアル文学」が示すように、このプロジェクトも、植民地主義文化やポストコロニアル文化の問題に関心を集中しつつあったのだが、ちょうどこの時期、ある出版社から、ポストコロニアル文学のガイドブック出版の企画が寄せられたのだ。

そこで、制度的な研究プロジェクトからはいったん降りて、この本の共同執筆に専念することになったわけである。いま述べた「帝国の文化とポストコロニアル文学」の執筆者全員、(旧)CSCの「非制度的」メンバーや「アメリカ文化研究の可能性」のメンバー、それに研究科内外の協力者、あわせて15名が、この年から翌年にかけてこの本の執筆に取り組み、その結果、平成17年(2004年)の初夏に『ポストコロニアル文学の現在』(木村茂雄編、晃洋書房、2004年6月)が出版された。

そして翌年の平成18年(2005年)度から、「ポストコロニアル・フォーメーションズ」(Postcolonial Formations、略してPCF)と衣替えして、ふたたび私たちの共同研究プロジェクトが開始された。院生は相変わらず制度面での出入りが多いが、研究会全体のメンバーやその進め方は、CSC時代とそう大きくは変わっていない。現在、研究会の出席者数は10名を超えることが多いが、そのほぼ半数は「正規」メンバー以外の院生や研究科修了生である。つまり、制度的な共同研究プロジェクトやその報告書は、この研究会活動全体の一端にすぎないともいえる。

PCFは、その名の通りポストコロニアル問題系をおもに扱っているが、それもここではじまったわけではない。ただしこの10年間で、ポストコロニアル問題系そのものが徐々に変化してきたこともたしかだ。グローバリゼーション状況におけるポストコロニアル性の問題が次第に前景化してきた、一口で言えばそういうことになるだろう。2001年9月11

日の事件およびその後の世界情勢は、その氷山の一角にすぎない。このような動きのなか、ポストコロニアル存在とその問題は、いわば近づくと同時に遠ざかりつつある。たとえば、移民社会の拡大やグローバル資本の展開により、「第一世界」と「第三世界」が同じ場所に混在する状況が生み出される一方、グローバリゼーション支配は、その流れからも排除された「サバルタン」たちを増加させている。ときには不均衡なかたちで展開している、これらの多様なポストコロニアル性の形成を複数的に捉えること、それが「ポストコロニアル・フォーメーションズ」というプロジェクト名に込められた意図である。またそこには、ポストコロニアル状況に対する私たちの視座そのものを多様に形成し直すという意味も含まれている。

ちなみに、平成17年（2004年）度には、研究科全体の大規模な再編拡充が行われ、私自身は「現代超域文化論」という新しい講座に属することになった。組織改編のさまざまな意図はさておき、現代文化の「超域性」という視点は、理念的には、上に述べたような現代世界の人間や文化の流動化という現象とも深く関わっているにちがいない。そして、私たちの新しい本でも「越境」という言葉がそのタイトルに掲げられることになった。

### 3. 『英語文学の越境—ポストコロニアル／カルチュラル・スタディーズの視点から—』

この本には10名の執筆者による10編の論考が収められている。執筆者名を列挙させていただきたい。論文掲載順に、山田雄三、伊勢芳夫、古東佐知子、松木園久子、加瀬佳代子、神田麻衣子、村上八重子、杉浦清文、小杉世、木村茂雄の10名である。また10編の論文はすべて過去のプロジェクト報告書、すなわち『カルチュラル・スタディーズの理論と実践』（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）と『ポストコロニアル・フォーメーションズ』（Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ）に掲載されたものをリライトしたものである（昨年春の『ポストコロニアル・フォーメーションズⅣ』は準備の関係で加えることができなかった）。『カルチュラル・スタディーズ』シリーズにはとくに、この本に収録することができなかったカルチュラル・スタディーズやアメリカ文学・文化関係のすぐれた論考が含まれているが、出版企画にしたがって、また執筆者たちとも相談して、これらの論文を割愛しなければならなかったことは残念である。

『英語文学の越境』の「英語文学」(Literatures Written in English)は、基本的に英米文学以外の「ポストコロニアル文学」を指すニュアンスが強いが、本書ではむしろ、そこにイギリスとアメリカの文学も加え、それをイギリスやアメリカの「外部世界」との関係において捉えるという視点が重視されている。そのような趣旨から、最初のセクション「イギリスとアメリカ」には、イギリスの1950年代のニューレフト運動と当時の国際情勢との関わりを論じた山田論文、植民地時代のイギリス人作家によるインド／インド人表象に「反抗者の肖像」を読み取る伊勢論文、リチャード・ライトの作品を作者のガーナ独立運動やアジア・アフリカ会議との関係などから捉えた古東論文の3編が収められている。

2番目のセクション「インド、アフリカ、カリブ、オセアニア」には、これらの地域の文学文化の越境を扱った6編の論考が配されている。ガンディーの独立運動をめぐるヒン

ディー語小説と英語小説を「サバルタン」の表象という関心から比較分析した松木園論文、ガンディーの思想がソーローに影響されたものだとする定説の誤りを、英語の言説空間との戦いという角度から論じた加瀬論文、2人のケニア人による戯曲『デダン・キマジの裁判』とコンラッドの『闇の奥』の比較をひとつの軸に、アフリカ表象における語りの主体のせめぎあいを論じた神田論文、クツツエーの『恥辱』に隠された子殺しのテーマを、主人公の“disgrace”の多義性や南アの状況と絡めて論じた村上論文、リースの『サルガッソーの広い海』の白人クレオールが置かれた曖昧で境界的な位置性を多角的に論じた杉浦論文、現代ニュージーランドの教育、メディア、文学におけるマオリ語・マオリ文化の状況を詳細に紹介・分析した小杉論文である。

3つ目のセクション「ポストコロニアル理論」の木村論文は、ポストコロニアル理論と新しいコスモポリタニズムとの関わりを、差異性と普遍性の葛藤というテーマを軸に検討している。

「越境」という言葉にもおもに3つの意味が意識されている。それはまず、「英語文学」が以上のように、イギリスやアメリカの境界を越えて生産されてきた状況を指している。ふたつ目には、英語文学「研究」の越境という意味が込められている。これは私たちがCSCそしてPCFで学んできたことだが、伝統的な文学研究には収まり切れないさまざまな種類の文化言説や文化活動を、多様な方法により研究対象としていく姿勢である。最後に「言語の越境」という点がある。ポストコロニアル研究における英語（ないし欧米語）中心主義はかつてから指摘されてきたことだが、この本の論考のいくつかは、ヒンディー語、スワヒリ語、マオリ語などの現地語の知識に裏打ちされたものであることは、ぜひ宣伝しておきたい。ポストコロニアル研究あるいは英語文学研究を本格的に進めていく上で、このような言語の越境はますます重視されてしかるべきだろう。この面では、大阪外国語大学との統合が力になってくれるかもしれない。

以上は非常に大雑把な紹介である。カルチュラル・スタディーズ、ポストコロニアル研究、英語文学などに興味のある方々は、本書のテキストにぜひ直接あたっていただきたいと思う。

最後に、この文章の自己省察を一言。前回（今年の3月）のPCFの材料のひとつは、おもに日本の「1968年」を扱ったものだった。「1968年伝説」に対しては批判的な論考だったが、研究会では、そのような立場にもかかわらず、その「回想の語り」がはらんでいる危険性が指摘された。その語りにおいても、1968年を語る語り口、あるいは語りの枠組み自体は温存されているのではないのか？たとえば、「集団就職」の世代が「全共闘世代」をどう見ていたのか、そのような点はほとんど言説化されることがない。私のこの「回想の語り」も、その「過去」を誰が、どのような位置から、どのように切り取って言説化するかという制約を免れたものではないことを断っておきたい。